

連載号

対談インタビュー

後編

『デジタル版美術資料』の 活用方法と可能性

前号に引き続き、横田先生と藤田先生に、授業を振り返りながら、今後の『デジタル版美術資料』への展望についてご対談いただきました。

前号のVol.17、18とあわせて
ぜひ、ご覧ください。



タブレットと手書きの違いと美術で大切なこと

横田 指での画面操作に何の躊躇もなく、特に説明がなくても「わからない」生徒はいません。しかし、自分の感じたことや気付いたことを書いたり、簡単な絵にしたりするときに、「いくらでも書き替えられる」というよさがある一方で、書きかけてすぐに消してしまう様子が見られる点が気になりました。

藤田 そうなんです。私としては、たとえ間違えたとしても思考の過程が知れる方がよいと考えていますが、実際は生徒が恥ずかしがって全部消してしまうことが多いです。



◀タブレットを操作する生徒の様子

写真の添付や貼り付け、感想文の記入など指先で容易に操作することができる。



よこた まなぶ
横田 学 先生

『デジタル版美術資料』監修者、『美術資料』著者、
京都市立芸術大学名誉教授

横田 鉛筆で書かせる場合に、消しゴムを使わないという制限をすることもあります。たとえ使ったとしても、なんとなく前に書いたものが残っていることがありますよね。消せるという安心感もよいですが、「消す」ではなく「残しながら次に何とか繋げよう」という試みが、特に美術では大切なのではないかなと思います。

また、生徒が失敗したときにタブレットなどのスイッチをすぐに切ってしまうというお話もよく耳にします。美術の時間は「スイッチを切ればリセットできる」ではなく、「ああでもない、こうでもない」と、積み上げていく、少しずつ変えていく、そういう力をつけていく場でもあるのかなとも思います。

藤田 リセットしたら終わりという世界でない世界を組み込んでいきたいですね。

さらには、消しきれない間違いみたいなものを、教員側がもっと許容しなければならぬと感じます。生徒たちなりに工夫していることや一生懸命に描いていることに「そんな落書きをして」などと言ってしまうのが気をつけています。

横田 ほかに、タブレットにおける作品画像も教員が拡大するのではなく、生徒が自分の指で、自身の見たいところを拡大するという実感が重要だと思います。

例えば、絵画鑑賞で、レンブラントの「夜警」を拡大して見ていくとしましょう。そこで、生徒自身が拡大したいところを明確にできる展開が大切になります。

改めて『デジタル版美術資料』のよさは単に見るだけではなく、書き込んだり、部分拡大したりする行為自体を教員が、生徒の「思考・判断」のひとつの情報として、上手く活用できるところです。

藤田 生徒が「どこに注目し拡大したのか」がわかる手段として、キャプチャー機能の貼り付けや、感想などの記録、まとめたことのクラス全体での共有も、本や紙ではできないタブレットの強みだと思います。

※イメージ図



本の『美術資料』と『デジタル版美術資料』のメリット・デメリット

横田 タブレットの活用は、「自分でもっと引き出したい」という、生徒の主体的な活動に繋がっているのでしょうか？

藤田 そういう部分とそうでない部分の両面があるように思います。生徒はいろいろと発想を巡らせますが、常にタブレットを持っている状態なので、「後でコメントを追加しておこう」と思いながらも忘れていることが多いです。よって、感想文などの提出率や内容の濃さは、正直、紙の方が高いと感じます。

横田 では、本の『美術資料』と『デジタル版美術資料』の違いや、使い分けについてはどう思われますか？

藤田 本の『美術資料』は…



メリット

- 探しているページの記憶が残りやすい
- 全面印刷の図版は迫力がある

デメリット

- サイズが大きいため、机上での作業が難しい

一方、『デジタル版美術資料』は…



メリット

- タブレットがB5サイズほどであるので手軽

デメリット

- 見たい資料が探しにくい
- ふせん機能はつけられるが、前に読んだページをそのままにはできない（次の授業ですぐに開きたい）



ふじた すぐる
藤田 優 先生

三田学園中学校高等学校教員
(兵庫県三田市)

以上のようなそれぞれの特徴を場面に応じて使い分けることで、より効果的な授業展開とすることができるのではないのでしょうか。

横田 確かに、本は、探しているページが前の方にあったのか後ろの方にあったのか、物理的なイメージがしやすいですが、タブレットは難しいですね。

では、『デジタル版美術資料』をさらによりよく充実させるならば、何を求められますか？

藤田 コンテンツの量や図版の種類としては、本の『美術資料』は完成されているように思います。そこで、『デジタル版美術資料』には、「本に載せきれないこんなところがあるよ」とか、生徒が本の『美術資料』を見たときに「これはどうなってるんだろう？」と疑問に思ったことを解決できるアイテムがあると、面白いのかなと思います。

横田 なるほど。例えば、富士山などは写真と絵との違いを見せられるので、面白いでしょうね。授業として作者の意図を考えると、基になったものを「こういう風に表現したんだ」という繋がりは大切になります。

『デジタル版美術資料』のさらなる可能性

こんなの
欲しい～!!



- ☆本の『美術資料』以上の情報
- ☆簡単なアニメーション、作品のモチーフの実際の写真など
- ☆（教員にとって）教材研究で、地元に関連させた資料収集のヒント
- ☆作者の表現意図を探る資料
- ☆作品の裏側は？美術館で体験できるような鑑賞の工夫

今後の『デジタル版美術資料』の更なる発展に期待しましょう！！

秀学社の美術学習サポート

授業だけでなく家庭学習などにもご活用ください。

『デジタル版美術資料』

『美術資料』の内容+ビュー機能で、ICTを活用した新しい学びを実現！

体験版や商品
詳細はコチラ！



- 『美術資料』の詳細や、ワークシートなど各種ダウンロード資料を提供しています。
- 秀学社Webサイト
<https://www.shugakusha.co.jp/>

まなび!net へのご意見や
著者へのメッセージ、ご質問など、
「お問い合わせフォーム」より
お気軽にお寄せください。

先生の声をお聞かせください。



お問い合わせフォーム
https://www.shugakusha.co.jp/form_otoiawase/

ココから！